

お 名 前	性 別	終戦時の年齢	現 住 所
原田 恒夫 つねお	男 性	1 5 歳	新城市二本松

「豊川海軍工廠 学徒動員で爆撃体験」

私は豊橋の前芝から第二中学校へ通っていましたが、昭和20年6月19日の豊橋空襲の後、新城の庭野に疎開していました。当時3年生でしたが、学徒動員で現在の諏訪駅近くに寄宿して、朝7時頃から夕方6時頃まで、お国のためと毎日働いていました。戦況はいよいよ厳しく、何となく重苦しさを感ずる日々を過ごしていました。

8月7日、いつものように隊列を組み、抜けるよな青空を見上げ、第3機銃と第4機銃の間にある調質工場へ出勤し、機銃の弾を送り出すバネを作る作業を始めていました。午前10時頃、警戒警報が発令、すぐさま女子は退避にかかります。間もなく空襲警報になり、男子も一斉に防空壕へ飛び込みました。10時13分より爆撃が始まり、26分間で2,256発（推定）の500ポンド爆弾が落とされたのです。

第3、第4機銃工場の間には簡易防空壕がありました。幅が1mぐらいで上に板を載せ、土をかぶせただけの防空壕です。私はとっさにすぐ近くの西門の方へ逃げ、いつもと違う、上がコンクリートで固めてある防空壕へ飛び込みました。その時、御津の町の三河湾の方角をちらっと見ると、大きなB29の大編隊が目に入りました。大変なことになりそうな予感がしました。その防空壕には、まだ誰も入っておらず、私は一番奥に腰を掛けました。しばらくすると7、8人の女子学生が泣きながらなだれ込んできました。

「ザーッ！」というトタン板をたたきつける雨のような音がすると、「ズズズズズーン！」と地面がゆすれ、防空壕の壁土が崩れ落ちました。その時、入口の方で「あぶない！逃げろ！」という声がしました。後で考えると、神の声としか言いようのないひと声でした。それがなければ、私はその防空壕にそのままおり、直撃弾を受けて死んでいたかもしれませぬ。私はその声に反応して、すぐに入口へ足を向けましたが、女子学生たちは泣いて動こうとしませんでした。私は下駄ばきでかき分けるようにして外へ出ると、道を隔てた目の前の工場へ爆弾が落ちました。あわててもどり、防空壕の中へ頭から飛び込みました。爆弾がおさまると、すぐ起き上がって西門の方へ走って行きました。その時はまだ西門は爆撃を受けておらず、イモ畑もまだそのままでした。再び爆撃が始まりました。私はイモ畑の畝の間に伏せました。体を四つんばいにし、指で目と耳を押さえ、腹は地

に付けないようにしました。爆風で目や内臓が飛び出さないようにするためです。さらに、門から西へ20～30mくらい行った細い水路にしゃがみ込みました。爆弾の間隙をぬうようにして、そこから赤塚山の方へと友人といっしょに逃げました。途中、田や畑にはすり鉢のような大きな穴があいていて、死体があちこちに見受けられました。胴体だけになっていたり、ちぎれた足だけ靴の中に入っていたりしましたが、その時は無神経になっていたのか、何とも感じない状態でした。逃げるのに必死だったからだと思います。



西門から逃げ出す様子 工廠の絵作品集より

夕方近くなるまで赤塚山にかくれており、帰る途中で炊き出しのおにぎりをかじりながら、9時ごろ寮へもどりました。すると、行方不明者として自分の名前が表示されていました。私を心配して、父親が様子を見に来ていました。当時、父は御津南部国民学校に勤務しており、帰りに寄宿舍へ寄ってくれたのです。父は表示に私の名前があることを確認していました。私が、「お父ちゃん！」と肩をたたくと、父は振り返ると、目を丸くして飛び上がりそうになりました。うれいかと思ったようで、「足はあるか？」と確認するのです。私が死んだものと思っていたようです。許可があったので、父といっしょに夜道を歩いて庭野の家まで帰りました。父は自転車を引きながら、「こんなにうれしいことはない。」と何度も何度も言いました。家に着いた時は、深夜になっていました。私の無事な顔を見ると、みんなほっとしたように喜んでくれました。やっと長く熱い一日が終わり、いっぺんに体の力が抜けたように感じました。

翌日には工場の片づけのためと、炎天下埋められた死体の掘り出しなどのために動員されました。言葉では表現できないような悲惨な状況でした。私が避難した防空壕は確認できませんでしたが、機銃工場の間にあった簡易防空壕では圧迫死で何人か亡くなりました。爆弾の威力で防空壕がつぶされてしまったのです。土を掘って遺体が出てくると、「ふーっ！」と息を出す瞬間がありました。体内に圧迫されていた空気が出るのです。その中には豊橋二中の同級生もいました。

私たちの年代は戦地へは行きませんでした。それ以上に悲惨な体験をしたように感じました。雨あられと降りそそぐ爆弾の中、怪我ひとつ負わず生きのびたことは奇跡というしかない体験でした。

このようなことは悲劇をまねく戦争は、二度とあってはなりません。戦争に近づかないようにするために、私の体験談が役立てばありがたいです。